慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルサス人口原理の本質
Sub Title	
Author	竹村, 豊太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.6 (1927. 6) ,p.792(70)- 821(99)
JaLC DOI	10.14991/001.19270601-0070
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270601-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルサス人口原理の本質

竹村豐太郎

ワグナーのマルサス批評――本質觀の混亂――「マルサス人口原理」三命題とその構造上の中心點――先づ本質觀の一致く

一　ワグナーのマルサス批評

アドルフ・ワグナーに、マルサス人口原理を批評した有名な句がある。曰く

Robert Malthus behält somit in allem Wesentlichen recht!

これを以て彼は其マルサス信奉者としての態度を明にし（註一）、ロッシャーが同じくマルサスに與へた評言、Aber die Grundansichten von Malthus können als festes Eigentum der Wissenschaft gelten (κτῆμα ἐς ἀεί!)(Grundlagen der Nationalökonomie, 25. Aufl., Stuttgart 1918, S. 760)以來重ねてマルサスをしてドイツの學界に重きを加へせしめた。而して其 in allem Wesentlichen と云へるは Grundansichten を更に强め數十年を隔てて（註二）ロ氏の評言を確認すると共に、一層明に、其マルサス信奉の内容が in allem Wesentlichen なる旨を、即ち Grundansichten なる旨を、即ち末節に拘泥せず本質のみを取扱はんとする批評的態度なる旨を高調せんとする。故に此の句の内容は二層の概念によつて構成せられると云つてよい。基層には彼はマルサス人口論の如何なる部分を以て其人口原理の本質なりとせしかの本質觀があり、それの上にはじめて此の句が持つところの論理的内容が可能である。

（註一）この句は彼の Lehr- und Handbuch der politischen Oekonomie の Erste Hauptabtheilung 之なす Grundlegung der politischen Oekonomie. Dritte Aufl. Erster Theil: Grundlagen der Volkswirtschaft, Zweiter Halbband, Leipzig 1893, s. 665 にある。一八七九年の第二版にはない。然のみならず、第二版には僅か三頁しか投ぜられてなかつた人口論について第三版には三百二十一頁に費されてある。ワグナー經濟學に於ける人口論的興味の一大跳躍であることをも注意したい。

（註二）ロッシャーの「原論」第一版は一八五四年に出た。此の句が第一版に既に書かれたかは確かではないがドイツに於ける諸家の示す用例によればそのやうに推定出來る。少くとも十三版まで遡つても（Principles of Political Economy, transl. from the 13th German edition, by John J. Lalor, New York 1878, II vol., p. 291.）最近版と同樣に § 242 の註十五として出て居る。十三版は一八七七年出版である。而してワグナーの句とロッシャーの句との交渉はロッシャー原論改修繼承者 Pöhlmann によつて其第二十四版（1906, S. 756）に於ける同一箇所（この箇所は第二十四版だけには註十四）に一九〇四年にディーツェル（後段詳細）が引用した形に於けるワグナーの句を採錄して兩者を對照せしめ相補はしめてから一層密接になつた觀がある。

碩學の言は魔力を持つ。それは往々にして學問的眞價以上に買はれる。それは往々にしてそれが碩學の言なるの故を以て無批判に受容せられるばかりでなく、他をしてこれをこれの本來の論理的内容と異れるものにもの表被たらしめんとの焦慮を與へる。ロッシャーを背光とする、それ自身既に偉大なワグナーのこの評言が魔力を有するも亦異とすべきでない。それが如何なる程度に又如何なる範圍に亘つて魔力を發揮し或は正當に理解せられ不當に影響したかを擧げ盡すことは出來ない

が、偶々目に觸れたものに次の如き例がある。

先づ Heinrich Dietzel がある。彼はワグナー門下の一人として Festgaben für Adolf Wagner zur 70. Wiederkehr seines Geburtstages, Leipzig 1905. 中に Der Streit um Malthus' Lehre なる一文を寄せ其マルサス信奉を明言し、付して曰く「故に余はアドルフ・ワグナーと共に云ふ。Malthus behält in allem wesentlichen Recht.」と（同書 S. 52）。Carl J. Fuchs 亦同じくマルサス信奉の態度を示すにワグナーに同意するを以てするかの如く「……然れども今日國民經濟學に於ける大勢は依然として Malthus hat in allem Wesentlichen recht (Adolf Wagner) である」と云ふこと久しい（Volkswirtschaftslehre, Leipzig 2 Aufl. 1909, S. 134; 4 Aufl. 1922, S. 139）（註一）。同樣な影響はドイツの學界にのみ限られたことでないやうである。何故なれば Knut Wicksell はスウェーデンに於ける其一例を示す。彼曰く「マルサスの說に對する反對論の大部分は科學と交涉すること極めて尠いものである。今日生存する國民經濟學者中、アドルフ・ワグナーが其 Grundlegung の第三版（註二）に於て以て人口學說の詳細なる說明を結びたる Robert Malthus behält somit in allem Wesentlichen recht なる語に同意せざるもの尠いと云ひ得る」と（Vorlesungen über Nationalökonomie. Auf Grunglage des Marginalprinzips, übers. Margarethe Langfeldt und durchgesehen vom Verfasser. Theoret. Teil, I. Bd. Jena 1913. S. 48）。これを更に我國の文獻に求めるなら、藤村法學士は其「人口論・マルサス說の研究」（大正十三年發行）の第三の中、第三章（六一五頁以下）の題目をドイツ語のまゝで Malthus behaelt in allem wesentlichen Recht と掲げて曰く「ここで吾人はマルサスを以てわがアドルフ・ワグナーと共に『凡ての點に於て本質的の眞理』を語れるもの（註三）と斷定するのである」と云つてるのがある。

（註一）フックスの第一版に出て居たかどうかはその原本を見ることが出來ない爲に不明なりし爲引用せざるだけのこと。

（註二）彼が特に第三版と記せることの正しきことは前段の註七一頁）參照。

（註三）藤村氏の引用は明記してあるやうにディーツエルよりの再引用であるから、ワグナーの用ひた文字によらずしてディーツエルの文字を以てワグナーの用ひたものであるかの如くして居るのは不得止をして、ディーツエルのやゝ、誤譯し易い書き方の陷穽に陷つて誤譯して居ることを指摘しておく。in allem wesentlichen は正しいドイツ語の書き方に隨へば in allem Wesentlichen でワグナーにも、フックスにもウイツクゼル譯文にも、更にペールマン加筆のロツシヤー原論中のディーツエル彼自身よりの引用文にも、こう書いてある。而して後者のやうに書けば間違ひなく判るやうに、この句は Recht とは切りはなした副詞句で、藤村氏の譯語を生かして全文を譯出すれば「マルサスは凡ての本質點に於ては依然として正しい」となる。更に注意して Eulenburg: in der „Deutsche Literaturzeitung" vom 24. August 1901, S. 2150-54 (Zit. Dietzel a. a. O., S. 20) を讀め。オイレンブルグがガツペンハイマーの反マルサス的人口論著（後出七七頁）に對してなせるこの書評中に、暗にワグナーの句を相手として、これに反句たらしめんとした ……man ungefähr sagen: Malthus habe in allem wesentlichen Punkten unrecht. は正にこの解釋を裏書する。これらの場合に於けるワグナー引用はワグナーを論ずるが爲でなく、勿論ワグナーを辯護するが爲でなく、却つてこれによつて自家の主張にワグナーの背光を借りんとする又はかれに同意を表することによつて生ずる滿足或安易を得んとする手段として行はれて居ると考へられる。ワグナーは彼等の說に證人たるべく立たしめられて居る。然るにワグナーのこの句がこれらの各の場合に於て如何なる效果を以て證人の役目を果して居るかは、其の引用の語句の不思議な程それ〳〵に違ふ以上にやゝ複雜である。ワグナーの句が論理的に證人たり得るにはその句の主辭を規定する基層概念

in allem Wesentlichen の意味がそのまゝに保持されながら使用されてあることを要する。保持されるとは理解の意識的持續である。私は他人の言句を引用する時に其他人がこれに到達したまでの細末の論程やその言句の全ての部分に亘つてまで同見であることを必ずしも要求する程に極端ではない。然しながらそれに用ゐられた用語の中に基層概念に關するものがその内容たる概念について不注意に用ひられてある時にかゝる引用が論理的に何を意味するやを訝るものである。況んや其結果、内容概念を異にして單に文字上の一致があるのみの場合が起るならば、かゝる引用は虚飾でこそあれ、學問的には價値なく、原著者を瀆し、徒に讀者の思辨を擾すのみであらう。以上の場合に於てワグナーの原句に於て盛られたるその in allem Wesentlichen なる概念は如何に取扱はれ理解され保持せられ、從つて如何なる論理的價値を有して居るか。問題はワグナーを中心とするマルサス人口原理本質觀となる。

先づワグナーをして云はしむ。

マルサスの不滅の功績は在來の制限なき人口增加奬勵説を覆へして人口と物資に不可避なる關係あるを明示したるに在る。而して人口增加たるや本來性慾を原因とする强烈なる本然の傾向にして常に增加の遲々たる物資の量を超過せんとする危險を藏するが故に、兩者の可能なる關係はたゞ人口增加妨害によつて保たれるの外なく、この妨害の遂行には制慾と死亡數增加との何れかを選び得るのみである。「これ所謂マルサス人口原理を構成する骨子である。」彼はこの説を其著書の第一編第二章の終りに三箇條の命題として掲げた(Grundlegung der polit. Oek., 3. Aufl., S. 453, 454)。

即ちワグナーはマルサス人口原理を以て人口數決定原理なりと見た。然らばその決定は如何にして行はれるか。ワグナーが掲げたる人口增加公準なるもの次の如し。

一定の生産技術、一定の交通販賣仕入の諸關係、生産分配に關する一定の法制、民衆一般の一定の生活程度、從つて亦民衆の勞働の難易、種類、分量及慾望滿足慾の强度、種類、範圍に於ては、勞働能力あり且勞働意志ある社會成員(勤勞者)の供給を續けながら、少くとも從前通りの、能ふべくんばそれ以上の割合の財生産增加即ち國民所得增加の諸條件を充すが如き人口增加のみが望ましいとせられる(S. 663, Vgl. S. 636)。

然しながら實際に當つては「それ以上の割合の」生産力增加即生活程度向上が、ワグナーによれば、望ましいと考へられこそすれ、覺束ないばかりか「少くとも從前通りの」生産力比率維持即生活程度維持さへも、常に人口增加の大勢に脅されんとする。かくて彼の過剩人口論が生れてマルサス説を髣髴せしめるのである。曰く、如何なる産業進歩、社會制度の改善によつて擴張せられ得る人口收容力をも突破する力が人口增加に存して、其原理は容赦なく作用する。人口增加は人口過剩の危險を近よらしめる。只其あとに行はれる生産進歩がこれを一時的に矯正するのみである。そして再度の人口增加を可能ならしめる(S. 642-643)。故に如何なる經濟組織の下、如何なる國民經濟發達階段に於ても、過剩人口の危險は常時に存在すると考へられねばなるまい。而して之を豫防するには唯、人口の中に働く人間本來の本能衝動を調制することのみが有效なのであるから、かゝる豫防的傾向を實現せしめかゝる調制を助長するが如き民俗を涵養するを以て社會の任務とする(S.

655)。かゝる調制の努力の有意的に行はるゝことを要する所以は統計的經驗の明に示すところである。即ち社會的經濟不況の後に來るかゝる好況は定規として人口增加を助長し、これと反對の場合は制限的作用を發動せしめる(S. 525-528)。即ち人口增加が物資の增減によつて支配せられることを觀察するに於てワグナーは全くマルサスの忠實なる祖述者と考へられ得る。次の一節はこの點を表す好例である。

交通の發達、技術の進歩をはじめ、法律及行政上の規定よりして現はれる生活條件のあらゆる改善の場合、殊に急激な痙攣的な亢進的な改善の場合に人口動態に副作用を與へる危險がこの中に存在する。かゝる副作用が現はれるならば其間、かゝる改善は困難となるであらう。このことは又、完全なる自由結婚及性交自由、これと共に兩親の子女扶養義務の輕減、かゝる義務の社會への轉嫁、の制度の下における社會主義的生產及分配組織の場合にも、既に詳言されたやうに明かに問題として殘る(S. 656)。

斯くの如くにして縷々二百二十頁に亘る人口原理論議の結果彼が到達したるところ次の如し。

このことを避けんとするならば即ちあらゆる經濟法制及組織の下に於て常に必ず現る相對的過剩人口の危險を除き、同時に生活條件と文化進歩との嬰退の、又は人口增加に對する積極的妨害作用發動の悲しむべき結末を豫防せんとするならば、そして又、かゝる事情の下に於て期待さるゝ人口移出が充分に行はれ且續行され難く、生產殊に農業に於ける技術的進歩及外國市場に於ける其國の製品及事業の有利なる販路保持及擴張、並にこれらの市場よりの外國製品及事業の有利なる仕入關係の保持及擴張が有效ならざること、既述の如くんば、其期間については一般に唯一の有效なる方策あるのみである。即ち人口增加に對する豫防的傾向の充分なる作用これ。しかも人口稠密なる農業的工業的國際商業的に高度に發達せる國民經濟に於てはもとより、社會主義の制度による國民經濟及立法行政の方法によつて勞働階級及細民階級の福利增進を努めて同樣の制度に接近しつゝあるが如き國民經濟に於ても同樣充分に、これが適用される。

Robert Malthus behält somit in allem Wesentlichen recht! (S. 665)

即ちワグナーに取つて、マルサス人口原理の本質は必然且常在的過剩人口傾向論にあること彼自身の學說にあると同樣である。であるが故に、であつてこそはじめて、マルサス說を其本質について信奉の確言を敢てした。其道德的抑制を高調したのは政策的見地からであり、其根據するところは如上の點に外ならぬと共に、マルサスに於けるが如く、道德的抑制を過信して夢想鄕を描くに興味をもたない彼の到達する處も結局必然且常在的過剩人口傾向論である。

二　本質觀の混亂

ディーツエルとウイックゼルは略類似した立場にあつてマルサス人口原理を觀察してワグナーに同意する。ディーツエルのこの論文は Oppenheimer (Das Bevölkerungsgesetz des T. R. Malthus und der neueren Nationalökonomie, Darstellung und Kritik, Berlin-Bern 1901) 及 Wolf (Ein neuer Gegner des Malthus. In der „Zeitschrift für Sozialwissenschaft," 1901, S. 256 ff.) によるマルサス說反駁に對する反駁であるが、彼等の反駁說の中のマルサス說の「本質的核心」となさるゝ點について

批評を試みんが爲起稿されたとある（S. 21）。

反對者が「本質的核心」として論破せんと企てたのは、人口の增加に對する食物の壓迫　即人口は食物の增加の遲々たるが故にその增加を妨げらるるとの點にある。然らば、何故に十九世紀に於て人口の增加それ自身激甚なりしと雖猶食物の增加に及ばず、隨つて平均的に生活程度向上し、更に一般に何故に過去において文化の進展は可能なりしや。デイーツエルはこれに答へる。かゝる事實は正にマルサス說において豫想せられてあることに外ならない。文化の進展はマルサス說の反證にならないの（S. 34）。これをマルサスは道德的抑制乃至一般の豫防的妨害の作用によつて說明する。即ち出生率の抑壓がこれを可能にする。實に「かゝる現象を實現せしめ、それを根據としてかゝる自然法則が人間の理性によつて破らるゝことを確立すること――これ却つてマルサス說の眼目を成すものである」（S. 39）マルサスは文化高まれば常に出生率低下することを期待した。其期待が實現したのである――但し恐らくは、彼が豫期したより急激に且度汎に。もしも彼がかゝる事實を眼前に目擊したならば、彼は却つて其望ましき結果のあまりに明に現はれたことに驚くのみであらう。

「故に余はアドルフ・ワグナーと共に云ふ。Malthus behält in allem wesentlichen Recht」（S. 51-52）。

デイーツエル、ウイツクゼルに取つて、マルサス人口原理は同じく人口數決定原理であるが、ワグナーは其決定の主動を國民所得の增加に求め、彼等はそれを理性による豫防的妨害に求める。其結果ワグナーにあつては常在的過剩人口の危險が豫想され隨つて僅に可能的に願望されるものは生活程度維持なる消極的靜態であるが、彼等にあつては可能的に過剩人口の危險が除去せられ隨つて

確實に期待され得るものは生活程度向上なる積極的動態である。前者は文化退轉の恒常的傾向に對する防衛を高調しやゝもすれば悲觀論的であるに反し、後者は文化進展促進を眼目に置き常に光明ある將來を確信せしめる。しかも彼等は彼等の論旨をこれと異る論旨を內容とするワグナーの言を以て確立せしめんとする。

かゝる論理的關係に於て使用されたまゝのワグナーの句がワグナーを意味するかデイーツエルを意味するかは甚だ不明瞭であらう。其當惑の實例を與へるものは藤村法學士による引用の場合である。同氏はこれをデイーフエルの論文五十二頁から引用してワグナーの名を擧げて居る。而してこの句の內容は次のマルサス說要約によつて明にされる。

第一に彼は情慾は恒久不變で略現在の狀態を保つべく從つて人口は若し制限せられなかつたら二十五年毎に幾何級數的に增加すると考へた、……

彼は曰く、食料の增加は算術級數である、從つてその增加は人口の增加に比ぶれば極めて緩漫なるものである」……

彼はいふ、食料は人間に必要なるものなるが故に、人口は必然的に食料によつて制限せらるると、……而して彼は更に人口を制限するものが食料ばかりでないことを考へて――彼は之を極めて稀なことであるとはいつたが――

若も人口がある力强く且つ明かな制限によつて妨げられない限り、人口は食料の增加する所に增加すると、……

而して最後にマルサスは人口に對する「結局の妨げ」たる食料並に食料以外の制限を以て「直接の妨げたる道德的抑制、罪惡及び不幸に歸すると考へた……（藤村法學士著前掲書六一六―七頁）。

然しながら同氏の所論は必じしもこの要約によつて推測されるものでなく、其本質觀は一見ワグナーのそれに似るべき筈の如くにして然らず、明かにディーツェルのそれにも非ず、以上の何れのものよりも茫漠としてるが、これを兩者の本質觀によつて類推するならば、人口制限の力の食料以外に明に尙一つあるを論ずる點（八九頁、四一〇―一二頁）から考へると、其の尙一つが何であるかを明示しては居ないが、其觀念がディーツェル的であることが推察される。

フックスも亦、平明公平にワグナー的にマルサス說の說明を試みて居るが（前掲書 S. 133）、人口數決定の主動については次の如く自由な解釋を下し、上記の何れのものからもかけ離れて考へる。

食料があらゆる場合の人口にとつて超過を許さざる最上限界をなすことは陳腐なほどに正當である。只、問題は、人口が果して常に現實にこの限界に到らんとするや、達するや、即ち食料が果して現實に人口運動の調節器たるや、或は他に如何なる經濟的社會的生理的或は心理的要因あるや、である。

然しながらこの問題は全世界について一樣には答へられない。常にたゞ一國、一國民經濟についてのみ答へられる（S. 134-135）。

フックスによれば、等しくワグナーに據ると雖、recht behalten するものは人口數決定原理でなくて人口數增加極限の原理であるから、其概念はワグナーに對してディーツェルのそれよりも遙かにより理論的であるけれど、全く正當とは云はれない。Louis Kraft をして云はしむればマルサス人口原理の形而上學的部分のみを擧ぐるにとゞめたものである（Bevölkerungsprobleme, Tübingen 1917, S. 59）。

× × × × × ×

フックスの「陳腐なほど正當」な論點は即ちマルサスの三命題の第一命題にあたる。曰く「人口は食糧に依つて必ず制限される」（佐久間氏譯マルサス人口理論、二一頁）。この論點のみに據つて即ちこの論點をマルサス說の本質としてマルサスを信奉するは、マルサスの言葉と何等積極的矛盾を來すことなくして經驗事實にも沿ひ易き爲か、マルサス信奉者の中に今日最も明瞭である。仍ち次に目下學界の信望篤き一流の學者が其最近の代表的論著に於て取れる態度を記してこの點を窺はんとする。

Karl Diehl は其 Theortische Nationalökonomie. II. Bd. Jena 1924, S. 72-73 にマルサスの三命題を論じて、これら三つのうち第一のものが只に最も重要なるのみならず唯一の支持し得べきものとなす。この第一命題の根底をなすものは實に收穫遞減法則であつて、生活資料の增加の一定の自然的制限が存在するからである。この土地法則こそマルサス人口原理の理論的根據と考へられる。經濟學者が承認を與ふるは只第一命題にのみであつて、マルサスの他の二箇の命題は輕卒な一般論であり、時に前者に對する矛盾でさへある。

これと殆んど同等な立場にあつてマルサス說を信奉する我學界の耆宿福田博士はディールに先ん

ずること七年、大正六年發行の「國民經濟講話乾卷」に於て論ずる。以下の引照は大正十年の「改訂增補國民經濟講話、完」によつた。

福田博士はマルサスの新說に三部分ありとして曰く、

第一、人口の增加は食物の增加よりも速かなる傾向を有すとの自然法則。

第二、食物の增加は人口に對する需要の增加と看做す。若し人口に對する需要が增さなければ食物は增加せぬ。

第三　將來に於て人口の供給は天然の需要に超過して不調和を生ずる傾向がある。故に豫防的抑制、殊に道德的抑制によつて之から起る積極的抑制の慘を防がねばならない（五二八—五三〇頁）。

この三箇の命題は其內容必ずしもマルサスの命題と一々等しいとは云へないが、少くとも第一命題はマルサスの第一命題の基礎概念を表してると考へられる。而して博士はこれを以て「永遠不朽の眞理であります。彼の說の主要部分は此點に存するのでありまして、他の部分は云はゞ附けたりであります」となし（五二八頁）これを以て「マルサスの第二版に於て訂正した說は、今日に至るまで學問上の定說となつて居る」と斷言する（五二六頁）

Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 4te Aufl. において近世人口史、人口學說史、人口政策史、人口問題に亘つて詳細且有益なる論文を寄せ、人口論文献中の權威たらしめた Ludwig Elster は其結語に於て云ふ、

「人口は食糧に依つて必ず制限される」。この第一命題は自明の眞理にして何人によつても抗論されない。これと同樣に、人間は其自然の衝動に從ふならば食料よりも迅速に增加することも亦抗論し又はし得ない。何故ならば收穫遞減法則が人口の增加には存しない制限を食料及原料の生產に置くからである」。

然し彼は第二命題を承認しない。たゞ僅に人口の過剩を防ぐ爲に道德的抑制を高調したるを以て其說の中心なりとして、今日マルサス人口原理は何等の修正をも必要とせず、「只、マルサスを讀むことの勞をとれ。彼の說の核心は何によつても辯駁されてない」。それはロッシャーの云つた如くに今日もある、と云ふ（H. Bd., S. 824-5）。

三先生の說は、ワグナーから分離し來ながらもワグナーの句を引用せるが故に或はワグナーの說に惑かれるが故にや、不能不透明であるフックスのそれよりも、フックスの分離の貢獻によつてか、より明かに、マルサス說信奉の中心的對象はその人口數增加極限の原理であることを示してゐる。只エルスターだけは特に道德的抑制を中心點とすと明記して居る點から云へば、ディーツェルの態度を取るものの如く見える。否、以上の如き說が現代の人口情態に妥當ならんとすれば、かゝる態度は避け得ないやうであるが、必ずしも然らざる如く思はしむるものに福田博士の道德的抑制杞憂論（前揭書五三〇、五五一頁）があり、問題はやゝ複雜である。後段再說。

以上二種類の因緣をたどつて擧げたマルサス人口原理本質觀を一括して對照せしめる。

一、人口數決定原理なりとするもの

（一）、決定の主動を國民所得もしくはその同類概念に歸するもの——ワグナー

（二）、決定の主動を人口に對する理性の豫防的妨害に歸するもの――ディーツェル、ウィック
ゼル

二、人口數增加極限の原理なりとするもの――フックス　福田博士、ディール、エルスター

以上の分類は本質觀のあらゆる可能から、或は廣汎な學說史的瞥見から歸納してなされたものでなく、單に偶在的な二種類の因緣を機として擧げられたものであるから、此外に多くの本質觀の可能と事實とがあることは云ふまでもない。更に、こゝに用ひた例は、マルサス說信奉者の說が本質觀を窺ふためには反對者のそれよりも一般的により具體的であり包括的であるとの便宜上の考から、いづれもマルサス說信奉者の說である。然しこれらの三種の本質觀は研究批評の對象となり得べきものを可成によく網羅し代表すると考へられる。筆者はこれをある程度の滿足を以て考へる。そしてかゝる異說の例示の方法が、異說を生ずるに到りし事情背景をやゝ明にし、異說の據つて立つところの相當に理由ある根據を見るを容易ならしめる。少くとも　かくの如くにして明白に對照された異說のあることはマルサス人口原理本質觀が一の問題であり、其說を評價する前に充分なる本質觀研究の要あることを示すであらう。もしもそれにもかゝわらずかゝる例示及分類が獨斷ならずやとの不安あれば、これらの異說を批評する爲の規準概念を得るために次に行ふマルサス人口論の純論理的考察が、これに何れかの答を明示すると考へる。

三　「マルサス人口原理」

人口原理の書としてマルサスの An Essay on the Principle of Population 正版（註）は次の如き構造を持つものとして考へられる。

第一部、原理。第一編第一章及第二章。

第二部、原理を東西古今の實例によつて說明且證明す。第一編第三章以下第二編全部、但佐久間氏譯によればこれらの章の結論的章たる第二編第十二章及第十三章が「第一卷第三章及第四章」として譯出してあるだけで他は全く省略されてゐる。

第三部、當時英國に行はれ或は論議されたりし學說及政策を以上の原理によつて批評す。第三編、佐久間氏譯第二卷に當る、但譯書には穀物關稅論に關する二ヶ章を略す。

第四部、以上の原理によつて必然の結果とせらるゝに到りし社會的病弊を矯正する爲にその原理によつて社會政策を提唱す。即ち道德的抑制の提唱。第四編、但佐久間氏譯第三卷。

（註）私は「マルサス人口論」取扱便宜上、第一版から後年の諸版を區別して、前者を初版、後者を一括して正版と呼ぶ。其理由並にこゝに正版を資料として彼の「人口論」を討議することの理由については、三田學界雜誌第二十卷第十二號拙稿一一三―一一四頁其他參照。佐久間氏譯書については同稿一三九頁以下參照。

「マルサス人口論」、原書の書題によつて直譯すれば「マルサス人口原理に關する一論」、の理論的內容が卷頭の僅々二ヶ章にありとはやゝ奇異な感を與へるが、その二ヶ章が原理の部として盡してるとすれば、當然でからねばならない。このことは Coleridge の有名なる冷評（註一）にもかゝわらず一般の間に普通とされてある。マルサス自身初版から正版への改訂に際し、全卷に對するこの二ヶ章の地位をそのまゝに保存した。同じ態度はアシレー版に於ける同書拔萃の場合にも、The Elements

of Social Science, or Physical, Sexual and Natural Religion. By a doctor of medicine, London 1854 (I. ed.), and later editions に於けるマルサス摘錄の場合にも(三田學會雜誌第二十卷第十二號一一四頁以下參照)窺はれる。勿論、彼の原理が悉く二ヶ章で了つて居るのではない。補足的論議が全卷の各部分に亘つて行はれてあるばかりでなく、もし忠實にこれらの中に潛在する精神をとるならば原理の二ヶ章の記述を修正しなければならない點すらもある(註二)。原理の叙述と其解說應用とも云ふべき他の部分の叙述とに理論的內容の相違があるのは、そのありと主張せられる範圍內に於てマルサスの著書の構成上の缺點と云はなければならないが、この場合に何れを以てマルサスの眞意なりとすべきやと云へば、其れの原理の部であることを答へるのに躊躇を要さない。それは著者の著作の時に於ける心理からも、讀者の受けると期待されてる當然なる印象からも肯定されるべきである。何故ならばマルサスが其正版に於ける原理の部以外の資料及論述の大部分を取扱ふに到つた以前にその原理の骨子を既に胸中に藏してゐたことは之をほゞ初版の原理の章に記述して以來變らないで居ることを以て明かではあるけれども。その初版の原理を生むに到つたものは初版の原理の部以外の部に於て取扱はれた資料及論述よりの正しき歸納である筈であつて、正版のかゝる資料及論述も初版のそれらも其の人口論的に意味するところ等しいからである(註三)。マルサス信奉者の間に、彼の說を社會の經驗的事實に適合せしめ以て其の妥當を支持せんが爲に、其の原理の記述を他のいはゞ偶然的な他の意味に使用されるかも知れない資料、他の意味を含ましむる爲に云はれたかも知れない論議によつて修正的に解釋し、これをマルサスの原理の正しき解釋なりとした後で、マルサス說に修正を要せずと結論する論法を追ふ風潮があるのをこゝで警める。解說によつて理論を再考し解釋することは當然であるが、理論として記されてあることに明に反するまでに自由になつてはならない。一般の人にとつて單純且抽象的に理論を表現する時の錯誤の機會は、見つくせぬ程複雜な意味を藏することの多い實例の解說論議によつてこれを一層有效に行はうとする時の錯誤の機會ほど大きくないことが、一應はマルサスについても云はれて差支ない。かゝる反省なくしては正しい思辨は不可能である。それはマルサスの曲解私製とはなるかも知れないが、少くともマルサスの正解否私解ともならないであらう。

かゝる理由によつて、原理の章に現はれたるものを以て原理を窺ふに最も適するものと見做し、以下考察の資料とする。

（註一）コレリッヂの「マルサス人口論」に對する批評の重なものは四つ折りの二版に屬する原著の欄外に彼がペン及鉛筆を以てなした書入れであり、其書物は彼の指定遺言執行人 Dr. Joseph E. Green の藏書たりしもの、今は British Museum にある。其の序文七頁の處に曰く Are we now to have a quarto to teach us that great misery and great vice arise from poverty, and that there must be poverty in its worst shape wherever there are more mouths than loaves and more Heads than Brains! (Cit. Bonar: Malthus and His Work, 2nd ed. London 1924, p. 372)

（註二）其最も問題となつてゐるらしく思はれたものの一例は、マルサス人口原理と文化の進歩との關係である。嚴密なる論理的批判によれば、原理の部に於ける記述はマルサスが後章に於て取扱つてゐる歷史的人類學的實例の示す意義と抵觸する

（註三）此點についてマルサスは其著書の第二版の序に於て云ふ「而して其後も(即ち第一版出版後)余は思ひを此問題に馳

する毎に其極めて重大の事件なるを感ずると共に、一方には余が議論によりて大に世論を喚起したることを知るが故に余は遂に心を決して再び人口の原則の社會の過去及び現在に及ぼせる結果を論究し、一層廣く且つ詳細に是を説明し　且つ過去の經驗を以て是を證明し、余が議論をして更に實際的にして、且つ永久の價値を有せしめんと企圖するに至れり」。（三上氏アシレー版譯九〇頁）。

仍て更に「マルサス人口論」の中その根本原理を叙述する二章を詳細に吟味するならば、それは次の如き構造をもつものと考へられる。

第一部、總説。

一、生物生殖と食料增加との不調和――凡ての生物は食料より速かに增加する傾向がある（佐久間氏譯四頁、以下佐久間氏譯書を用ふ）。

二、不調和の矯正。

（一）動植物の場合――死滅による（四―五頁）。

（二）人間の場合――この結果を豫見するの能力あるが故に、ある程度まで生殖機能を抑制す。抑制の不充分なるによりて起る過剩增加分は生活困難に陷る（五頁）。

第二部、總説の論證、分析。

一、人口增加と食料增加との不調和。

（一）人口增加――生理的可能の極限に於ける增加力は歴史的事實によつて示され得ぬほど絶大。故にその中の增加力の大きい例を取つて考へて測定の材料としても不足でこそあれ誇張とは云へない（六―七頁）。

（二）食料增加――文明國に於ける事實によつて推すに、目下如何なる狀態にある土地と雖、一定期間に遂げられた生産物增加量を、いつまでも繰返して增加生産をつゞけて行くと假定することは、この上もない樂觀説である（八―一一頁）。

（三）兩者の不調和――二十五年毎に人口は等比級數的に增加する性質を有し（八頁）、食料は等差級數以上に增加することが出來ない（一一頁）。

二、不調和矯正の程度――生活資料の水準に抑止（マルサス曰く「人口增加の勢は何日も食料增加率に比して遙かに大きいのであるから、人口增加の趨勢は、之れに制限的結果を及ぼす强力な必然法が不斷に作用することに依つて、纔に生活資料の水準に抑止せられるのである」。十二頁）。

三、不調和矯正の手段。

（一）豫防的手段――早婚の抑制、惡風。但前者が道德的に行はれる場合と然らざる場合とあつて然らざる場合を後者に屬せしめる（十三―十六頁）。

（二）積極的手段――豫防的手段の不充分であるだけについて、貧困がこれを行ふ（一六頁）。

第三部、總説にある原理を根據とする歴史理論。

一、文化の律動性。

（一）後退の行程――生活安易は人口過剩を來らせ、過勞と結婚抑制との形における生活難

を來らせ、死亡率も亦增加す（一七―一八頁）。

（二）前進の行程――過勞は生產力を增加せしめ、他方には結婚抑制と死亡率增加は人口增加傾向を抑制し、以て再び生活安易に達するに至る（一八頁）。

二、歷史的現象として不明なる理由――觀察困難、歷史研究の幼稚、統計の不完全、名義勞銀と實際勞銀とに差あること（一八―一九頁）。

以上要約分析したところによるとマルサスはこの原理記述の中に大別して二個の異なる問題を含ましめてゐる。即ち第一は自然事實なる人口增加現象の社會的作用の經過及結果、第二はこれを根據とする歷史理論、これである。前者は記述の大部分、即ち要約の第一部及第二部に當り、後者は第三部に當る。而してマルサスは其研究の範圍を明かならしめんとして「今予は各國に於ける此の進步退步の事實を確證しやうとはせず」（二一頁）と限定し、第二の問題を全く除外した。除外して殘された問題は唯一つ、人口增加現象の社會的作用の經過及結果。彼はこれを次の如き三つの命題の中に概括して考察に便ならしめんとする。

一、人口は食糧に依つて必ず制限される。

二、或頗る有力明白な妨害に依つて阻止せられない限り、食糧の增加は必や人口の加增を伴ふものである。

三、是等の妨害、並に優越な人口增加力を抑制して其の結果を食糧の水準に止めしむる一切の妨害は、三分して道德的抑制、罪惡、貧困の三となすことが出來る（二一―二二頁）。

而してマルサスが原理の章に揭げたもので明に其研究の範圍から除外した以外のものが粗漏なくこの三命題によつて窺はれることは、さきの記述要約とこれとを嚴密に比較照合するときに、何人にも容易に示されるであらう。そしてこの點に於けるマルサスの概括的妙腕は賞讃に値する。

四　三命題とその上の中心點

既論は必然的に「マルサス人口論」の理論的內容の結局がそれが著者自身によつて企てられた如く三命題によつて表はされて居ることを示すに到つた。三命題のかゝる內容構成上の地位はこゝに縷々として證示するの勞をとることを必要としないかのやうに見える。それは明に、或は時にあまりに單純にと思はれる位明に、常にマルサス人口原理敍述者の間に傳統であつた。本論文中の本質論に關係して引用した諸學者の著書中この傳統を持さなかつたものはたゞディーツェルのそれのみである。それも、その論文の量と其の負はされた特殊の任務の上から云へば當然すぎる程當然である。他の諸書にあつては就中、エルスターと藤村法學士はこれを英語原文のまゝで記し（Elster: a. a. O. S. 757. 藤村法學士著前揭書九一頁）、更に後者の著書は實にこの三命題を採つてそのマルサス說研究構論上の骨子としてゐる。然し私は出來るだけ輕卒或は獨斷を疑はれないやうに、豫期された反對論に對して前以て答へるつもりで、人の試みないこの三命題の構論上の價値發掘を行つたのである。

「人口は食糧に依つて必ず制限される」――第一命題は人口が一の生物學的現象として其增加にあたり突破し能はざる極限概念を示す。何故に極限の必要ありや。原理要約第一部總說の一にある如

く、生物は即ち人口は常に食料よりも速かに增加する傾向あるが爲である。又その第二部總說の論證分析の一にある如く、人口は等比級數的に食料は等差級數的に增加する性質、即ち人口は食料よりも速かに增加する性質あるが爲である。而してかゝるそれ自身で上壓的な超過的な性質をもつ力がある一定の高さに停り得る爲には、この力に抵抗して作用する別箇の力がなくてはならない。上壓作用はこの力が有效に働く點を極限として停止しこれ以上に騰らうとはしない。この場合人口なる上壓力に對して食料なる抵抗が對峙させられてゐる。人口增加力がそれ自身で恒常的に超過の傾向を現しつゝある上壓力であることを確めることはこの命題に於て最も大切である。かくあるが故にこそ單に生物學的生存の可能增加點の上限のみを規制する食料の抵抗が人口增加をある一定の高さに保つ。人口增加力の恒常的上壓性とは人口が食料より速かに增加するの性質を云ひ、其由來は既にマルサスに詳しけれどもその今日に意味するところ當時と異る如く見える點があるから略說を要する。

マルサスは其「人口論」初版には、立論のはじめに疑ふべからざる二個の公準を掲げ、この上に公平なる議論の基礎を置かうと企てた。曰く

一、食物は人類の生存に必要であると云ふこと。

二、兩性間の情慾は必要であつて、大體いまのまゝ變りがあるまいと云ふこと（高野大內兩氏譯書、一一―一二頁）

性慾が殆んど恒常である。又は少くともそれは人類の生殖現象に影響を及ぼす程な激を變遂げることはあるまい。平均的な肉體的健康を備へたある人口が性慾滿足の機會を常に求めつゝありとすればその人口の增加性がそれが可能となつた時毎に顯著であるべきことは容易に推測せられる。何故ならばマルサスに取つては性交は可能的に生殖に結果したからである。彼の人口の超過的增加傾向論は第一に性慾の恒常、第二にその生殖との自然的關係、の上に立つた。

第一命題の示すところは人口增加の極限であるが、この極限は事實亦人口數決定の規準として作用するや否や。もし單にそれが觀念上の極限であつて人口決定は他のものによるとするならばこの命題は一の生理學的或生物學的法則たるより以上の價値を持たないことになり一定數の人口あるに於て考へられ得る經濟上の問題について何等直接な交渉を持たないであらう。これを明かに示して第一命題の人口原理としての價値を定めるのが第三命題である。

條件句を省略して、通常の場合には「食糧の增加は必や人口の增加を伴ふものである」――第三命題は人口が刻々現實に社會的現象として其數を決定せられつゝある關係を示す。人口が食料を超過して增加し能はざることは第一命題によつて示されたが、今この命題は、人口が常に食料の水準に達しながらしかも超過せざることを明示し、食料が單に觀念的增加極限でなくて事實の決定尺度であることを確める。第一命題のみでは食料のみを計量しただけで人口を推定することは安否相半ばするが、第二命題で明になる。更に、兩者の中何れかが主要であるとすれば第二命題を推す。第一命題から第二命題に展開して行く爲に新な補助概念を必要とするけれども　後者はそのまゝで既に前者を含んで居る。然し眞の正兩者の關係は第二命題を中心とした補助關係にある。而してその關

係の中に置かれた時に、第一命題は食料による抵抗を現はし第二命題は人口增加力の恒常的上壓性を示し、二つの力と抵抗とが相調和した點に人口が決定されることを以て人口決定の原理とする。

人口の超過的增加傾向論がこれに事實化されてゐる。この上壓性は次の例によつて明にされる。それは輕氣體がもつ上壓性と等しい。輕氣體を盛つた容器の下方から更に多くのガスの供給が出來る仕組をなし、容器の上部の蓋を上方に動かす時は下方より供給によつて忽ち其量を增加し、蓋を下方に押し返せばガスは供給口から下方に逃れて容器內の量を忽ち減少する。人口に本性的に常に上壓力がある爲に、その增減はたゞ食料の增減と平行して行はれることになる。

第三の命題は明にこの決定原理の行はる方法を統制して人類の幸福を傷けること最も少き結果を來らせんが爲の政策を暗示するだけである。それは第一第二の兩命題の事後的考察である。人口原理の本體ではない。例へば三種の妨害の何れによるとも人口增加は等しく妨害をうけるだけである。

結局マルサスが目的として其人口原理の中に求めたものは人口數決定の原理であつた。マルサスの叙述これを證し、三命題これを明示する。マルサスが其あらゆる議論の基礎として置いたものは人口數決定の原理であつた。單に人口數決定が如何に行はれるかではない。それが食料によつて行はれることを內容とする原理である。人口は食料によつて制限せられ、又通常は食料の增加は必や人口の增加を伴ふ、の第一命題及第二命題の原理である。

五　先づ本質觀の一致へ

マルサスの人口原理が食料なる概念にて代表せられる生活資料として見たる財一般を主動とする人口數決定原理を中心點として、之の爲に準備された及之から導き出された諸命題の有機的一體であるとの考へ方は、さきに擧げたワグナーの本質觀に一致する。ワグナーはマルサスの食料なる用語を「國民所得」もしくは其同類の用語に變へただけである。彼はかゝる態度を以てマルサス人口原理に於ける all Wesentliches の何たるやを判斷し、且その判斷は正しい。彼はかくてマルサスに對して本質論的評價を與へる權利を持つ。

ワグナーの本質觀と必然的に一致しなければならなくなつた私は、當然彼のもの以外の種類に屬する本質觀には反對しなければならない立場に立つ。私はこれを明示して以て諸先生の叱言を得るの機としたく思ふ。

同樣に人口數決定原理なりと認めながら其決定の主動を人口增加傾向に對する豫防的妨害に歸するディーツル等の說はワグナー的本質觀主張者以外のマルサス說信奉者の大部分によつて支持される。殊に其中の二つの重要なる派は、其豫防的妨害を殊に道德的抑制なりとする純正マルサス派と、これに人工的姙娠調節をも含ましむる新マルサス派とである。等しく前者の中でも、新マルサス派に反對する程明にこれを主張するものと、これを默認するものとがある。

この本質觀がマルサスの第一命題を認めてゐることは記されてなくても明かである。何故ならば、如何なる種類の豫防的妨害でも、第一命題にあるが如き食料の絕對的制限があるからこそ考へられるからである。仍て、人口は食料の制限の範圍內で豫防的妨害によつて決定せられるとすれば、二

つの場合が想像される。曰く、豫防的妨害の效果が丁度食料の限界線上にまで人口の增加を可能ならしめる程薄弱である場合、及びそれが食料の限界線の以下に人口增加を抑止する程積極的である場合、これである。前者ならば第一命題は人口增加上位の事實上の限界となり隨つて第二命題を豫想して事實上の人口增加の上壓性を肯定し其結果はワグナー的觀察と一致するが、後者ならばそれは單に概念上の上位極限であるばかりで人口增加は通常それには事實に於て到達せず食料以外の力としての豫防的妨害の作用によつて中途に抑止されることになるからワグナー的觀察と相反しなければならない。而して何れの場合を意味しても打克ち難き論理上の困難がある。

第一、前者の場合の意味なりとすれば、それは事實に於ては食料と同じこと、即ち食料と同等の規制作用を、豫防的に行つた方面から觀察したことになるから、第一命題を人口數決定原理の一部として認め得ると同時に、第二命題をも文字通りそして又人口決定原理の他の一半として認め得るが、第三命題は否定される。何となれば、豫防的妨害が、マルサスの對象とし又ユトピア描寫家ならざる他の學者の對象としたる條件下に於て、薄弱なりとは云へこれだけの效果を充分に現して人口過剩を抑止する場合には、積極的妨害が人口調節作用として働く餘地がなくなるやうに見える。第三命題の概念は豫防的妨害及積極的妨害の兩者が其時の情況如何によつて相補的に人口調節を行ふことである。人口は其存在の性質持續的であるが食料は使用される都度常に新に生產される必要がある。故に適度なる人口が食料の急減によつて過剩人口現象を呈するに至ることは通常である。この場合これを矯正するものは豫防的妨害でなくて積極的妨害である。後者なき前者は意味がなく且第三命題修正、兩者を認めての前者の決定主動論は主動論として成立し得ない。兩者を認めた兩者の決定主動論なら成立し得るが、それは人口は全ての妨害によつて妨害せらるとの一つの循環論證に墮するであらう。

第二、後者の場合の意味、即ち人口增加の傾向が食料限界線の以下に抑止される場合、ならば、第一命題は單に人口增加の概念上の上位極限となり隨つて第二命題との關係を失ひ且第二命題が否定される。ディーツェル及大多數の同樣主張者の據る論法である。食料の抵抗のみによつて抑止せらるべき人口增加傾向の上壓性が否定せられて、人口は食料以外の意味の豫防的妨害によつて規定せられることを中心點とする。第三命題は肯定されるけれども、かゝる明瞭なる第二命題否定を以てマルサスを說かんとするは全く非論理的である。更に第一の場合の批評と同じやうに、豫防的妨害のみでは如何なる場合にも調制に主動となることは出來ない。

もし人口增加が妨害されなければならないならば、豫防的妨害の方が積極的即ち事後的妨害よりも遙により多く人格價値感情にふさわしいから、前者が選ばれるのが自然であるが、かゝる自然の傾向は人口決定原理が作用した結果について見られるもので、原理そのものの內容ではない。それは人間のかゝる場合に於ける價値判斷の法則的に一定の表はれである意味において原理そのものと法則的に關係すると云はれ得るが、それは明に原理以後に屬する。原理を考へたあとにはじめて考へられ得るのである。原理を考へたあとで、豫防的妨害、殊に例へば道德的抑制がマルサス說の特長であり最も優れた點であると云ふならいゝが、それが理論的本質であると云ふことは出來ない。

第一命題のみを支持して他には修正を主張しつゝマルサスを信奉するものはマルサス説を以て人口數增加極限の原理なりとすることになる――これ最後の本質觀である。もし人口原理が人口數決定には關係なく只その增加極限の概念を與へるだけならば、人口數は何によつて決定されやうとするか。マルサスはこれに答へなかつたことになる。故にこの論者は殆んど全て人口數決定の主動を豫防的妨害に求める第二の本質觀をもつ。たゞ兩者の相違は、前者は明に第二命題の修正を唱へて其主張の內容を論理的にしたのに、後者は多分これに氣づかず、第二命題をそのまゝにして非論理を敢てするにある。然しながら前者がかゝる觀察を以て本質觀とするに於て間違は何れも大同小異である　見よフッグスの上記引用文には人口決定原理なるものが遂に答へられないである　エルスターは道德的抑制を以て中心點なりと主張（a. a. O. S. 824-825）して頗る明瞭に第二の本質觀の誤りに陷つてゐる。

Robert Malthus behält somit in allem Wesentlichen recht!

ワグナーは忠實に且大膽にマルサスの Wesentliches を探求してこれに判斷を與へることによつて最もよくマルサス評價の模範を示した。不幸にして他の學者が此の耆宿に倣はず、恐らく忠實且虛心にマルサスを讀まず、殊にワグナーすらも讀むことなく、ワグナーの精神を探らずしてその用句のみを採り、堂々と名を掲げて異れる自己の觀察の表裝とした。議論の沸騰して何等有益なる結果の生れざるや當然である。

ワグナーの本質觀の正しきことと彼の評價の正しきことは別問題である。マルサス人口原理の批評として別に論ずべきそのことの以前に、批評すべき對象の何なりやを定め、群盲按象の愚を繰返さざらんが爲になされたこの考察は人口學說錯雜の今日無用ならざるを信ずる。

（二、一、一八）